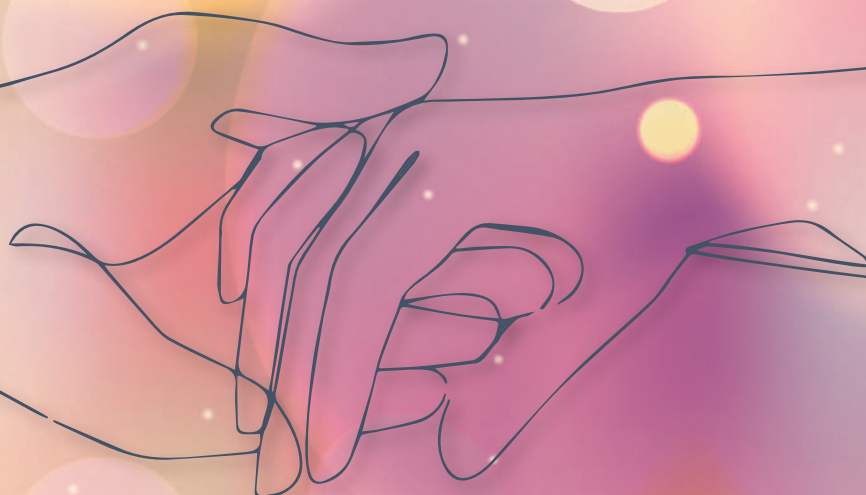


Shinano Male Choir

創価学会しなの合唱団 第28回定期演奏会



4/23²⁰²²
Saturday

4/23(土) 14:00開演
(13:45より配信開始)

主催:創価学会しなの合唱団

後援:JCDA日本合唱指揮者協会 東京都合唱連盟

今日は、「創価学会しなの合唱団 第28回定期演奏会」にご来場いただき、誠にありがとうございます。3年ぶりに定期演奏会を開催できる運びとなり、団員一同、皆様にお会いできる事を何よりも嬉しく思っております。

私達、しなの合唱団は、2019年9月14日に結成50周年を迎えました。「新たな50年の歴史を築いていこう」と出発した矢先、新型コロナウイルスの大流行により、音楽を取り巻く状況は一変しました。私達も対面練習の自粛や目指していたコンクールの中止などが重なり、思うような合唱活動ができませんでした。

こうした中で、「今すべき事、今だからこそできる事をやろう」と団員で話し合いながら、オンライン練習や合唱動画の作成、発表を続けました。2021年4月には感染対策を徹底したうえで対面式練習を再開。久しぶりに一緒に歌った時には、音楽の素晴らしさを再確認できました。

昨年は東京都合唱コンクールにも出場することができ、コロナ禍で合唱を披露できる場を得られたことに感謝しております。結果は銀賞となりましたが、本年のコンクールに向けて、団員一同、新たな決意で練習に励んでいます。

今回の演奏会では、2018年に作曲家・田中達也先生に委嘱し、その年に開催された第71回全日本合唱コンクール全国大会では自由曲として演奏して金賞を獲得した「Ⅲ. 死ト現象」を含む、男声合唱とピアノのための「三つの悲歌」を組曲として初演いたします。

今の私達があるのは、応援してくださる多くの皆様、そして団員を支えてくださるご家族のご理解とご厚情の賜物であると、団員一同、心より感謝申し上げます。

2022年も「目の前の一人」に勇気と希望をお贈りできる演奏を届けて参ります。

今後とも、しなの合唱団に、より一層のご支援、ご鞭撻を賜りますよう、何卒宜しく願い申し上げます。

2022年4月23日

創価学会しなの合唱団 団長 小柴宏徒

団員一同

Shinano Male Choir



1st
stage

指揮 ピアノ
笹口圭吾×前田勝則 詩:宮澤賢治 曲:西村朗

同声(女声または男声)三部合唱と
ピアノのための組曲「永訣の朝」より
I. 永訣の朝

2nd
stage

指揮 ピアノ
笹口圭吾×前田勝則 作詩:逸見猶吉 作曲:田中達也

男声合唱とピアノのための「三つの悲歌」(委嘱初演)
I. 報告(ウルトラマリン第一)
II. 海の非情
III. 死ト現象(ウルトラマリン第三)

Intermission

3rd
stage

指揮 ピアノ
熊倉顕×前田大法

～今、みなさまにお贈りしたい曲～

君が君に歌う歌 作詞:Elvis Woodstock 作曲:大島ミチル

こころよ うたえ 作詩:一倉宏 作曲:信長貴富

群青 作詞:福島県南相馬市立小高中学校平成24年度卒業生(構成・小田美樹)
作曲:小田美樹 編曲:信長貴富

青年よ広布の山を登れ 作詞:山本伸一 構成:野田順子 作曲:甲斐正人

4th
stage

指揮 ピアノ
清水敬一×前田勝則 作詩:大岡信 作曲:木下牧子

男声合唱組曲「方舟」

I. 水底吹笛

II. 木馬

III. 夏のおもひに

IV. 方舟



©Kiyotane Hayashi

おぬき いわお
小貫 岩夫 [ボイストレーナー]

同志社大学卒業後、大阪音楽大学卒業。同志社時代は同志社グリークラブに所属しソリストとして一時代を築いた。音大在学中の95年「魔笛」タミーノ役に抜擢され、テオ・アダムと共演しデビュー。この成功により翌年、ケムニッツ市立歌劇場(ドイツ)に招聘出演し、二期会、新国立劇場を中心に活躍。07/10年二期会「魔笛」タミーノ役(実相寺昭雄演出)、11年佐渡裕プロデュース「こうもり」アルフレード役などで喝采を浴びた。近年は立て続けに二期会のオペレッタで主役を歌い、なくてはならない存在となっている。コンサートでも、主演オケとの共演で高い評価を得ている他、テレビ・ラジオにも度々出演。2010年から毎年、東京と大阪でリサイタルを開催し好評を得ているほか、紀尾井ホールでは様々な楽器やダンス、役者と共演し、新しい形のリサイタルを定期的に行っている。2013年上皇上皇后両陛下御親覧の舞踏会で演奏し、お言葉を賜る他、フィレンツェではイタリア元首相夫妻主催のコンサートに招かれた。合唱の指揮者としても関西学院グリークラブ、慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団、立教大学グリークラブ男声などのヴォイストレーナー、大阪外国語大学グリークラブOB(東京)の指揮者として活躍している。二期会会員。東京藝術大学オペラ専攻非常勤講師。



しみず けいいち
清水 敬一 [指揮者]

1959年5月東京生まれ。1982年3月早稲田大学理工学部電気工学科卒業。指揮法を遠藤雅古、V.Feldbrill、合唱指揮を関屋晋の各氏に師事。現在およそ20の合唱団の指揮を任される。各地で合唱とオーケストラのための作品のコーラスマスターを務める一方、初演した現代作品も数多い。国内外の音楽祭・作曲コンクール・合唱コンクールの審査員を歴任。現在、JCDA日本合唱指揮者協会理事、東京芸術大学及び同大学附属音楽高等学校講師。著書に『合唱指導テクニック』(NHK出版)、『合唱指揮者という生き方 私が見た「折々の美景」』(アルテスパブリッシング)。月刊『教育音楽』(音楽之友社)誌上にて《折々の美景》連載中。



ささぐち けいご
笹口 圭吾 [指揮者]

大東文化大学文学部卒業。洗足学園音楽大学附属指揮研究所修了。指揮法を秋山和慶・河地良智、ピアノ・コレペティオンを島田玲子・橋本智紗、合唱指揮を清水敬一・清水昭の各氏に師事。関東各地で15合唱団の常任指揮者を任される。創価学会しなの合唱団を指揮し、全日本合唱コンクール全国大会にて3年連続の金賞、並びに特別賞受賞。江東少年少女合唱団の指導が評価され、江東区文化コミュニティ財団功労賞を受賞。一般財団法人民主音楽協会主催「はじめての合唱指揮ワークショップ」をはじめ、各地の指導者講習会の講師を歴任する。江東区文化センター講師、JCDA日本合唱指揮者協会理事、並びに事務局次長。



まえだ かつのり
前田 勝則 [ピアニスト]

山口県に生まれる。1998年東京学芸大学教育学部芸術課程音楽専攻卒業。2001年東京芸術大学大学院音楽研究科修了、修了時にNTTドコモ奨学金を授与される。ピティナ・ピアノコンペティションデュオ部門特級最優秀賞受賞をはじめとして、多摩フレッシュ音楽コンクール、日本室内楽コンクール、吹田音楽コンクール、大曲新人音楽祭コンクール、かずさアカデミア音楽コンクールなどに上位入賞。また、NHK-FM「土曜日サイタル」、東京文化会館新進音楽家デビューコンサート、ABCフレッシュ・コンサート、日演連推薦／新人演奏会など、多くの演奏会に出演。大阪フィルハーモニー交響楽団、広島交響楽団、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉と協演。これまでに、佐川愛子、徳万良子、石橋史生、植田克己の各氏に師事。現在、ソロ、室内楽、及び声楽・合唱のピアニストとして活発な演奏活動を繰り広げている。

プログラムノート

1st stage

～永訣の朝～

宮澤賢治が、結核を患った妹・トシ(とし子)との死別を綴った詩「永訣の朝」。詩集『春と修羅』に収められており、「松の針」「無声慟哭」との三部作でトシとの別れを描いています。みぞれが降る朝、まもなく臨終するトシのそばで、悲しみに暮れる賢治。そんな兄の姿を見たトシは、少しでも明るくなってもらおうと「あめゆじゅ とてちて けんじゃ(雨雪を取ってきてください)」と声を掛けます。欠けた茶碗を持って鉄砲玉のように飛び出す賢治。しかし、陰鬱な空から降るみぞれはどれも真っ白で美しく、賢治の心をより一層悲しい気持ちにさせるのです。最期まで兄のことを気に掛ける妹。妹との別れを受け入れ、死後の幸せを祈る兄。肌に伝う雫は雨か、はたまた涙か。詩人・宮澤賢治の兄妹愛を感じていただければ“さいはひ”です。

(谷拓宣)

2nd stage

～男声合唱とピアノのための「三つの悲歌」(委嘱初演)～

しなの合唱団の皆さんから新作の委嘱を…との打診をいただき、テキストの候補として浮かんだのはいつか合唱曲にできれば、と思ってずっと温めていた逸見猶吉の詩だった。逸見猶吉(本名・大野四郎)は1907年生まれ、祖父と父は明治時代に起こった大規模な社会問題である足尾鉍毒事件の対策として強制廃村となった栃木県下都賀郡谷中村で村長を務めていた。彼が廃村となった故郷を去ったのはわずか2才のときであり、本人の記憶としてこのことが刻まれているかは知る由もない。しかしこの「帰るべき故郷を失う」という経験は結果として彼の内面へ強烈な自意識を植え付け、詩作にも通底する反骨精神とさすらう心情の原形となったことはまたひとつの事実である。

本作では彼の代表作である連詩「ウルトラマリン」より第一・第三、そして中間に「海の非情」を置き、全3曲の合唱作品とした。「ウルトラマリン」は早稲田大学在学中、北海道を旅したときの印象をもとに書き綴られた詩であり、この作品をきっかけに彼は「日本のランボー」と呼ばれるに至る。彼の負った宿命と悲哀を振り切るかのように、少しずつ言葉は、音楽は終曲のAllegroへ向けて疾走していく。現在においても、様々な要因で生まれ育った地から離れざるを得ず、また戻ることもできない人々がいる。作品の構想を練る中で、この作品は詩人のみならずあらゆる人々の怒りを、悲しみを乗せていくようなものかもしれない…との思いから、全体の表題を「三つの悲歌」とした。

本作品の委嘱・初演にあたってご尽力いただいた皆さんに心より感謝申し上げます。

報告(ウルトラマリン第一)

ゴツゴツとしたピアノパートの音形と和声の連結の上に、凄みをはらんだ詩句が語りのように乗せられていく。全編にわたって貫かれるホモフォニックな声部進行が詩句の強さを一掃際立たせている。

海の非情

第1曲とは一転、海のうねりを思わせるピアノパートが旋律線を導く。後半では第3曲の和声進行が断片的に現れ、終曲へのつながりを予感させる。

死ト現象(ウルトラマリン第三)

再び「ウルトラマリン」に戻り、一層の凄みを増す詩句。主部における3/4拍子、Allegroのテンポ設定は何もかもを振り切って疾走するかのようだが、決して爽快なものではないだろう。曲はいくつもの展開を経て再び主部へ回帰するが、突然の切断をもって終わる。

(田中達也)

3rd stage

～今、みなさまにお贈りしたい曲～

「3年ぶりの定期演奏会に、みなさまにお贈りしたい曲は何かー。」

未曾有の感染症が世界を取り巻く中で、歌うことができる喜びに、私たちは「今、みなさまにお贈りしたい曲」を考えました。

団員が思い思いに推薦した素晴らしい曲たちを前に、合唱という音楽文化のよさを再確認するとともに、改めて「私たちが歌う意味」について考える大切な機会を得ました。

平和への願いを込めて、歌わせていただきます。

(細田英輝)

4th stage

～男声合唱組曲「方舟」～

水底吹笛 三月幻想詩

詩人・大岡信が生まれ育った静岡県三島市は、富士山の湧水が豊かな水の都として有名。「水底吹笛 三月幻想詩」は、大岡がそんな故郷の情景を描いた詩です。詩の舞台は水の中。ヒメマスの影がわかるほど透明な水底で、奏者は笛を吹くために腰を下ろします。しかし、水底の砂は崩れて安定せず、春めきはじめる弥生(=3月)の暖かい陽光は、絡み合う金魚草に遮られてうっすらとしか届きません。冷たい水は体温を奪い、唇は段々と青くなってしまいます。それでも、奏者は動じず、わずかな陽光に祈りを捧げながら、音の響かない水中で飄々と笛を吹き続けるのです。現実には不可能な行為を通じて“のぞみ”への憧れを表現する、哀調を帯びた旋律を奏でます。

木馬

シュルレアリスム運動で活躍したフランスの詩人ポール・エリュアールの詩が添えられた詩「木馬」。大岡が当時交際していた彼女(のちのかね子夫人)をイメージし、揺れ動く恋心を木馬(上下もしくは前後に動く遊戯具)に見立て、表現した作品です。夕暮れの空へ寂しげに消えていく木馬を見た女性は、自分の恋心がどこかへ飛んで行かないようにと、繋ぎ止めてほしい、愛してほしいと懇願します。手錠という枷をかけ、“やさしいひと”の愛から得られるものとは、焦燥感と安心感の狭間に揺れる淡い恋心を、メランコリックな曲調でお届けします。

夏のおもひに

「夏のおもひに」は、大岡が16歳のときに書いた作品です。“流れる”、“はなれる”、“みだれる”、“すべる”……多様な動詞が織りなすリズムは、寄せてはかえす波のさざめきにさえ聴こえます。西の空では徐々に陽が沈み、眼前にあった遊覧船は水平線に消えていく。刻一刻と変化する状況の中で、変わらないのは海辺の岩に身を預け、物思いにふける青年だけ。遠い思い出の中に光る面影を探す青年は詩人自身か、それとも……。男声合唱ならではの重層的な響きで、ノスタルジーな詩の世界を表現します。

方舟

人類への警鐘をうたった「方舟」。“空を渡れ”と、今まさに出航しようとする船団への大号令からは、急ぎ立てるような緊迫感がビリビリと伝わってきます。青々としていた地球は、争いや暴力で血に染まり、平和の象徴である鳩さえ遠い昔になくなった世界。豊かさを求めすぎた代償に勃発した戦争や紛争。すでに退廃した地上から離脱するために残された道は空、ひいては宇宙だけ。果たして、方舟に乗り込んだ人類が辿り着く先に“のぞみ”はあるのか。反戦へのメタファーにも似た力強いメッセージをお聴きください。

(谷拓宣)

同声（女声または男声）三部合唱とピアノのための組曲「永訣の朝」 宮澤賢治

I. 永訣の朝

けふのうちに
とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

（※1 あめゆじゆとてちてけんじや）

うすあかくいつそう陰惨な雲から
みぞれはびちよびちよふつてくる

（あめゆじゆとてちてけんじや）

青い^{じゆんさい}蓴菜のもやうのついた
これらふたつのかけた^{たうわん}陶椀に

おまへがたべるあめゆきをとらうとして
わたくしはまがつたてつばうだまのやうに
このくらいみぞれのなかに飛びだした

（あめゆじゆとてちてけんじや）

蒼鉛いろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまつすぐにすすんでいくから

（あめゆじゆとてちてけんじや）

はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽 気圏などよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

……ふたきれのみかげせきざいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち

雪と水とのまつしろな^{にさうけい}二相系をたもち

すきとほるつめたい^{しずく}霽にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいごのたべものをもらつていかう

わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ

みなれたちやわんのこの^{あゐ}藍のもやうにも

もうけふおまへはわかれてしまふ

（※2 Ora Orade Shitori egumo）

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ

あああのとざされた病室の

くらいびやうぶやかやのなかに

やさしくあをじろく燃えてゐる

わたくしのけなげないもうとよ

この雪はどこをえらばうにも

あんまりどこもまつしろなのだ

あんなおそろしいみだれたそらから

このうつくしい雪がきたのだ

（※3 うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

くるしまなあよにうまれてくる）

おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまころからいのる

どうかこれが^{とそつ}兜卒の天の食にまつて

やがてはおまへとみんなとに

^{きよ しりやう}聖い資糧をもたらすことを

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

※1 あめゆきとつてきてください

※2 あたしはあたしでひとりいきます

※3 またひとにうまれてくるときは

こんなにじぶんのことばかりで

くるしまないやうにうまれてきます

歌詞カード

男声合唱とピアノのための「三つの悲歌」 逸見 猶吉

I. 報告（ウルトラマリン第一）

ソノ時オレハ歩イテキタ ソノ時

外套ハ枝ニ吊ラレテアツタカ 白樺ノテツニ白イ

ソレダケガケワシイ 冬ノマン中デ 野ツ原デ

ソレガ如何シタ ソレデ如何シタトオレハ吠エタ

《血ヲナガス北方 ココイラ グングン 密度ノ深クナル

北方 ドコカラモ離レテ 荒涼タル ウルトラマリンノ底ノ方ヘ——》

暗クナリ暗クナツテ 黒イ頭吊カラ舌ヲダシテ

ヤタラ 羽搏イテキル不明ノ顔々 ソレハ目ニ見エナイ狂気カラ転落スル 鴉ト時間ト アトハ

サガレンノ青褪メタ肋骨ト ソノ時 オレハヒドク

凶ヤナ笑ヒデアツタラウ ソシテ 泥炭デアルカ

馬デアルカ 地面ニ掘ツクリ返サレルモノハ 君モシル ワヅカニ一点ノ黒イモノダ

風ニハ沿海州ノ錆ビ蝕サル気配ガツヨク浸ミコンデ

野ツ原ノ涯ハ監獄ダ 歪ンダ屋根ノ 下ハ重ク 鉄柵ノ海ニホトンド何モ見エナイ

絡ンデル薪ノヤウナ手ト サラニソノ下ノ顔ト 大キナ苦痛ノ割レ目デアツタ

苦痛ニヤラレ ヤガテ震トナル冷タイ風ニ晒サレテ

アラユル地点カラ標的ニサレタオレダ

アノ強暴ナ羽搏キ ソレガ最後ノ幻覚デアツタラウカ

弾創ハスデニ弾創トシテ生キテユクノカ

オレノ肉体ヲ塗抹スル ソレガ悪徳ノ展望デアツタカ

アア 夢ノイツサイノ後退スル中ニ トホク烽火ノアガル 嬰兒ノ天ニアガル

タダヨフ無限ノ反抗ノ中ニ

ソノ時オレハ歩イテキタ

ソノ時オレハ齒ヲ剥キダシテキタ

愛情ニカカルコトナク 弥漫スル怖ロシイ痴呆ノ底ニ

オレノヤリキレナイ

イツサイノ中ニ オレハ見タ

悪シキ感傷トレイタン無頼ノ生活ヲ

アゴヲシヤクルヒトリノ囚人 ソノオレヲ視ル嗤ヒヲ

スベテ瘦セタ肉体ノ影ニ潜ンデルモノ

ツネニサビシイ悪ノ起源ニホカナラヌソレヲ

《ドコカラモ離レテ荒涼タル北方ノ顔々 ウルトラマリンノスルドイ目付

ウルトラマリンノ底ノ方ヘ——》

イカナル真理モ 風物モ ソノ他ナニガ近寄ルモノゾ

今トナツテ オレハ墮チユク海ノ動静ヲ知ルノダ

II. 海の非情

うねりは深甚な藍青にくろまり
 キレの剄い気流のましたを落ちながれ 漂ひ
 油然と息をひそめ また一瞬にたかまつて
 砕けちり 錯乱する それもあらたに
 しづかな凄みの渦を巻きかへし おもひ返して 奈落へと墜ちなだれ うねり
 ああ 繰り返しの齒向つてくる無明の表情 これは涯しない肉体だ
 この目にみえて 見えるともない怒りこそ永遠の所有から
 踏み出す万の手の露はなるつながり
 鹹水に裸をさらしていま無尽な夢と格闘の
 槍穂の束のぎらぎらに醒め
 醒めきれぬまゝに立ち邀はふとしてゐるが……
 うねりはおほまかな足摺りで 灼ける水平から寄せてくる
 陸地をむざんに噛んでゐる

III. 死ト現象（ウルトラマリン第三）

^{キララ}雲母ノ下ノ^{スカイライン}天末線
 曝サレテキル骨ノ自暴
 ソコニ死ノヤウナモノガアル
 ヤミガタイ息ヅマル^{ケンロク}堅靱ノ胸盤ガアル
 ≪硝子ノ翼・硝子ノ血 コノ感情ニナダレコム冬≫
 透明ノ底ニ拵ガルモノ 滲ミ入ルモノ
 機械ノ一点ニ恒ニレイゼント狙ハレテアルモノ
 アア世界ヲ充顛スル非情ノ眼ヨ
 君ハ見ルカ 君自身ノ狂遇ヲ蹴落スコトガ出来ルカ
 君ノ内部ニ汜濫スルマラリアノ愛 ソレスラモナホ季節ハ残シテユク
 ウルトラマリンノ風ガ墮チ
 ウルトラマリンノ激シイ熱ノ勃ルトコロ
 ヤガテハ^{アノコ}燃焼スル^{コウボウ}
 彼処荒茫タル風物ノ奥デ ソノスルドキ怒リニ倒レテアルモノハ何カ
 俺ハ感ジル 石炭ノヤウニツライ純潔ヲ ソノ火力ヲ
 俺ハ知ル ^{カイヒョウ}海豹ノヤウニ齒向フ方角ヲ ソシテ今
 冬ハアレラ傷メル河河ニ額ヲヌラシテキルノダ
 北地ノバリバリシタ気圏ノナカ ソノキビシイ肩ヲスベリ
 際涯ト^{サイガイ}ホク沈ム汽車ノ隅カラ俺ハ遙ルカナ雲ヲ測ロウ

★

凄イ暴力ハナイカ
 自分ヲ視ルコノ瞬間ハ恐ロシイ
 ソレハ苦痛ヨリモ絶体デアル 風ニ靡ヒテ何処ヘ往ク
 原因ノアル処ニ生キテ逆転セザル妄想ヲ深メテ生ノ荒々シイ殺倒ノ底ヘ

★

タトエナキ^{ホウブツセン}拋物線ノ^{テイテン}挺転 流レ去ル粗悪ノ地理・停車場
 コノ重々シイ空間ニ懸垂スルモノ 充血スル顔ヨ
 ナントイフ^{キアラ}極度ノ^{スカイライン}貧困デアラウカ
 傾ムク黒イ汽車ノ一隅 ソコニハナンノ夢モナイノダ
 俺ハ君ヘ語リカケ 君ハ横ヲ見テ微笑スルバカリデアラウカ
 十二月・雲母ノ下ノ天末線鉄ノヤウニソレハ
 背ヲ向ケル無表情 天来ノ酷薄

※作曲の都合上、テキストの一部に変更を加えた。
 ※下線部は作曲されていない。

歌詞カード

君が君に歌う歌 Elvis Woodstock (リリー・フランキー)

君は 傷ついてないかい？
誰かを 傷つけてないかい？
正しいことにひねくれて
わからなくなる時があるから

君は 夢見ているかい？
誰かの 夢を笑ってないかい？
周りが敵に見えてたり
うらやましいと思ったりして

雲はちぎれて また かたまって
線を描いて 消えてゆくけど

今 君の未来が小さく暗く
見えていたとしても
その 想像通りにはならないから
心配しないでほしい
これは いつかの君が
君に歌う歌

足元に舞う 桜の花びら
踏みしめ 君は 漕ぎ出してゆく

恋をして すれ違い 離れ離れになる
涙が止まらないのは 悔しいからじゃない
それは君が
相手の痛みをわかるようになったから

卒業し 仕事して 立ち止まってしまう
涙が止まらないのは 出来ないからじゃない
それは君が
自分の可能性を信じているから

偶然なんて 本当はなくて
友達も 親も
奇蹟的に出会えたって気付く

セオリーなんて 本当になくて
初めての事が
物語を毎日紡いでく

清流と 濁流を 乗り越え
倒れたら 立ち上がり
汚れたら また 洗って

君は 大人になってゆく

夜空に浮かぶ 大きく光る星は
近くにいるから そう見えるんだ
消えそうな 小さく 暗い星を
指差してごらん

今 明るく見える星を通り過ぎて
瞬く そこを 目指してごらん
遠くにあるから 暗く見えているけれど
本当は どうなのか 見に行こうよ
どれだけ 美しく 輝いているのか

さあ

君は 悲しんでないかい？
誰かを 悲しませてないかい？
冒険は今 荒波を
越えれば やがて凧になる

君は 見上げているかい？
誰かを 見下ろしてないかい？
すべての星は同じように
キラキラ輝いていたんだよ

花は踏まれて また 蓄えて
種を残して 咲いている

今 君の未来が小さく暗く
見えていたとしても
その 想像通りにはならないから
心配しないでほしい
これは いつかの君が
君に歌う歌

未来の君が
君に歌う歌

こころよ うたえ 一倉宏

心よ
 だから心よ せめて歌え
 あなたの複雑 あなたの空虚
 あなたの震え あなたの繰り返しを
 あまりに散文的な日々も あんまりなエピソードも
 あたりまえのように 消えてしまうけど
 ギターもハーモニカもなくとも
 引っ掻き傷のようなその声でいいから
 ぼくは思いっきり哀しく思いっきり切なく
 そして思いっきり肯定的な歌を聴きたい
 だから心よ あなたは歌え
 いのち尽きるまで 歌え

群青 福島県南相馬市立小高中学校平成 24 年度卒業生
 (構成・小田美樹)

ああ あの町で生まれて
 君と出会い
 たくさんの思い抱いて
 一緒に時間を過ごしたね
 今 旅立つ日
 見える景色は違っても
 遠い場所で 君も同じ空
 きっと見上げてるはず

 「またね」と 手を振るけど
 明日も会えるのかな
 遠ざかる君の笑顔 今でも忘れない

あの日見た夕陽 あの日見た花火
 いつでも君がいたね
 あたりまえが 幸せと知った
 自転車をこいで 君と行った海
 鮮やかな記憶が
 目を閉じれば 群青に染まる

あれから2年の日が
 僕らの中を過ぎて
 3月の風に吹かれ 君を今でも思う

響け この歌声
 響け 遠くまでも
 あの空の彼方へも
 大切な すべてに届け
 涙のあとにも 見上げた夜空に
 希望が光ってるよ
 僕らを待つ 群青の町で

きっと また会おう
 あの町で会おう
 僕らの約束は
 消えはしない 群青の絆

また 会おう 群青の町で・・・

歌詞カード

青年よ広布の山に登れ 山本伸一

愛する君達よ

君らこそ

ゆうゆう たいが
悠々たる大河の流れだ

この流れは だれびと 誰人にも

と
止めることはできない

さまた
いかなる妨げがあろうとも

さらにさらに

水かさを広げながら

うなばら
海原に向かって

流れていくに ちが 違いない

* 青年とは

希望とは

真実とは

広宣流布という

友のための法戦を

つらぬ
貫きゆくことなのだ

(* 以下くり返し)

男声合唱組曲「方舟」 大岡信

I. 水底吹笛

三月幻想詩

ひょうひょうとふえをふこうよ

くちびるをあおくぬらしてふえをふこうよ

みなぞこにすわればすなはほろほろくずれ

ゆきなずむみずにゆれるはきんぎょぐさ

からみあうみどりをわけてつとはしる

ひめますのかげ――

ひょうひょうとあれらにふえをきかそうよ

みあげれば

みずのおもてにゆれゆれる

やよいのそらの かなしさ あおさ

しんしんとみみにはみずもしみいって

むかしまたすいしょうきゅうのつめたいゆめが

きょうもぼくらをなかくすのだが

うっすらともれてくるひにいのろうよ

がらすざいくのゆめでもいい あたえてくれと

うしなつたむすうののぞみのはかなさが

とげられたわずかなのぞみのむなしさが

あすののぞみもむなしかりうと

ふえにひそんでうたっているが

ひめますのまあるいひとみをみつめながら

ひとときのみどりのゆめをすなにうつし

ひょうひょうとふえをふこうよ

くちびるをさあおにぬらしふえをふこうよ

II. 木馬

夜ごと夜ごと 女がひとり
ひっそりと旅をしている
(ポール・エリュアール)

日の落ちかかる空の彼方
私はさびしい木馬を見た
幻のように浮かびながら
木馬は空を渡っていった

やさしいひとよ 窓をしめて
私の髪を撫でておくれ
木馬のような私の心を
その金の輪のてのひらに
つないでおくれ
手錠のように

III. 夏のおもひに

このゆふべ海への岩に身をもたれ。
ゆるく流れるしほの香にゆふべの諧調は海をすべり。
いそぎんちやくのかよわい触手はひそかに流れ。
とほく東に愁ひに似てあまく光流れて。

このゆふべ小魚の群の糸がく水脈に。
かすかなひかりの小皺みだれるをみ。
いそぎんちやくのかよわい触手はひそかに流れ。
海の香と胸とろかすひびきにほほけて。

とらはれの魚群をめぐるひとむれの鷗らに
西の陽のつめたさがくろく落ち。はなれてゆく

遊覧船のかたむきさへ 愁ひをさそひ。

このゆふべ海への岩に身をもたれ。
こころ開かぬままに別れしゆ糸
ゆ糸もなく慕はれるひとの面影を夏のおもひに糸がきながら。

IV. 方舟

空を渡れ 錨をあげる星座の船団
灯火は地球に絶えた 悲愁は冷たく迅やかだ
湖水の風に羽を洗う鳥たちはむなしく探す
昨日の空にはためいていた見えない河原を

ひとよ 窓をあけて空を仰ごう
今宵ぼくらはさかさまになって空を歩こう
秘められた空 夜の海は鏡のように光るだろう
まこと水に映る森影は 森よりも美しいゆえ

夜の奥に胸を開いて歩み入れば
地球を彩る血の帯ははためくだろう
憎悪の暗い洞穴をゆさぶりながら
夜のしじまにしたたりながら おらびながら

この星がふるさとであるか 血は血を泛かべ
この星がふるさとであるか 河は涸れ……
鳩たちが明るい林を去ってからすでに久しい
愛するものよ おまえの手さえ失いがちに